

サイエンスコミュニケーター だより

Volume 11, November, 2019



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006 年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」を開講し、その修了生はいまや 200 名以上となっています。

本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。

サイエンスコミュニケーターの声

常にファシリテーターであるという自覚

～生徒の一番身近なサイエンスコミュニケーターを目指して～

基礎研究か理科教育かのどちらに進むか、科学と教育の狭間で右往左往しているときに国立科学博物館のサイエンスコミュニケーター養成実践講座に出会い、科学を伝える重要性をあらためて感じ、理科教育を選択した。教育現場に立って数年、良い選択だったと身に染みて感じている。教員をしていて気が付くことは多く、毎日みんなに色々なことを教えてもらっている。

職場から学ぶこと

世の中に存在する教員は大きく分けて 2 パターンいる（と思っている）。一方は、もともとコミュニケーション能力が高く、生徒と接するのが好きな人間。もう一方は、元来はコミュニケーションが苦手だが「勉強」が得意で教員となった人間。特に両極端の人間が多い。前者はコミュニケーションに問題を感じず、後者はもともと人を遠ざける傾向にある。いずれにも言えることは、コミュニケーションを意識している人は少ないということだ。

そして、学校には、国語の教員もいれば、体育の教員もいる。まるで、社会の縮図のようである。そう考えると、前述したようなコミュニケーション能力が高い人もいて、コミュニケーションが苦手な人がいるのも当たり前のだと納得がいく。いろいろな人がいる学校だからこそ、常に私は、生徒と教員、生徒同士、あるいは教員同士のファシリテーターとなって、人と人をつなぐ役割を意識している。

生徒から学ぶこと

生徒から学ぶことも多い。生徒は人として正直であるから、授業がつまらないと（すぐ）寝る。話題に対して興味があれば、熱心に取り組むので、教員よりも生徒の方が詳しいことはよくある。生物部の生徒の生き物の観察能力は目を見張るものがあり、部活動紹介の生き物動画も TV 番組並みのクオリティーである。テロップやナレーションは部員ではない友人に見せてアドバイスをもらったりしてい

るらしい。これこそ、SC を体現しているのだと思う。

理科の授業を通して、直接生徒とサイエンスの間に立たされる仕事は悩みも多い。優先順位は特に悩ましく、受験勉強と、実験・実習と、重要ではあるが受験にはあまり必要のない教養と、生徒によってバランスは難しい。教員は学習指導要領や学校のレベル、そして受験などとの兼ね合いで、授業の計画を立てていく。

自身の授業でのスタンスは、「身の回りのものはすべてサイエンスでできているから、好きとか嫌いとか楽しいとか楽しくないとかじゃなくて、知っておかなければいけないのでは？知らないとだまされてしまうよ。ただし、学んでいく上で、嫌いでもいいけど、好きなほうが覚えやすいからお得なのでは？」と一貫している。このスタンスを軸に考えるのは、SC 講座があったからだと思っている。それでも優先順位に悩む。

これから

私が国立科学博物館の SC 講座でがむしゃらに学んだことが現場でとても役に立ったし、理解してもらうことの難しさに気が付くこともあった。教え子は年間数百人。生徒にとって一番身近なサイエンスコミュニケーターとして、焦らず、無理せず、私のサイエンスを伝えていく。



風間 智子

高校教諭／博士（学術）／国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター／しばしば出前授業やWSのアドバイスなどを行っている。



生徒による企画の一コマ。生徒の創意工夫にはいつも驚かされる。

活動紹介

科博 SCA の会員は、サイエンスコミュニケーションに関連するさまざまな活動を行っています。今回は、分科会の活動と、SCA が科博との共催で実施したイベントなどをご紹介します。

AZAbridge『せっかくなら稼げるオトナになりたいじゃない?』

(2019 年 3 月 24 日開催)



AZAbridge は、2016 年から麻布大学とともにやっている、大学で学んだ専門内容を生かして活躍する若手社会人のキャリアや仕事内容を紹介するイベントです。大学内のお堅いイベントのイメージを払拭する面白タイトルも持ち味の一つです。第 15 回目の今回は、製薬会社勤務の社会人が話題提供者でした。子供の頃からの夢や理想を持つ学生も多い中、理想の生活のために不自由ない収入を得ていくことについて参加者と対話しました。親子での参加者も多く、将来の夢やキャリアについて家族で考える機会も提供できました。

(あざぶりっじ分科会 SC 講座 3 期修了生 古垣内彩)

サイエンスコミュニケーター養成実践講座 (SC 講座) 修了後の学び

第 8 回科博 SCA 交流会 ～ SC 講座での学びと「キャリア」～ (2019 年 1 月 27 日開催)



科博 SCA では、会員が集まって意見を交わし合う交流会を定期的に開催しています。

8 回目の今回は「キャリア」がお題。学術関係の行政機関で働く会員とコンサルタントとして働く会員がそれぞれのキャリアとサイエンスコミュニケーションの繋がりについて紹介した後、参加者全員で対話しました。

自分と異なる専門家の理解、専門知識の活用、対立意見の調整、プレゼンテーション、ファシリテーション、マネジメント、……。サイエンスコミュニケーションとキャリアの接点は、考えていくと実は世の中にたくさんあります。

(SC 講座 9 期修了生・科博 SCA 副代表 杉山啓)

「もしも小学校のクラスに本物の研究者が混ざったら」実施報告

(2019 年 3 月 30 日(土)実施)

誰も「勉強する意味って何だろう?」と悩んだ経験があるのではないのでしょうか。そこで、ある意味毎日が勉強漬けの研究者にとっての勉強とは何なのか、専門分野を紹介していただきながら、小学生たちにその背中を見せるのが今回のイベントでした。ゲストとして、国立科学博物館で菌類と藻類の共生体である地衣類を研究している大村先生にお越しいただきました。まずアイスブレイクとして、仲間わけゲームを行いました。鯛や犬、鶏やクジラといったいろんな動物のイラストが描かれた紙を一人一枚ずつランダムに配り、「魚屋で売られているのは?」「海で泳げるのは?」といった質問を投げかけました。場の雰囲気や和ませると同時に、「考え方によって仲間わけの仕方は変わる」ということを体感してもらいました。その後、大村先生にご持参いただいた地衣類を実際に手に取って観察をしながら、どうやって似た地衣類を見分けるのか、実験や質疑応答を交えながら解説を行っていきました。大村先生のわかりやすい解説も相まって終始会場は和やかな雰囲気に包まれました。

イベントに参加した子どもたちはそれぞれ、生物学や天文学など様々な興味を持っていました。そうした「好き」を突き詰めていくことが勉強の意味になっていくのかもしれない。このイベントを通して少しでも自分なりの勉強の意味を見つけてくれたらうれしいです。

(科博 SCA 教育分科会 綾塚達郎)

